

巻頭写真 ネパール、カトマンズ盆地より産出した最終氷期の植物化石 Last Glacial plant macrofossils discovered in the Kathmandu Valley, Nepal

ネパール、カトマンズ盆地の中央部、シナマンガル (Sinamangal)、トリブバン国際空港 (Tribhuvan International Airport) の東側から植物化石が発見された。ネパールではこれまで断片的に植物化石の産出が知られていたが、これだけまとまって産出したのは初めてである。カトマンズ盆地の変遷史を明らかにするための地質調査にともなって発見されたもので、これまでの層序区分ではティミ累層 (Thimi Formation) に相当する河川成の砂質堆積物に含まれていた。産出した木材化石から24,000年前後と約37,000年の放射性炭素年代値が得られ、最終氷期後半のものであることが明らかである。この河川成堆積物は基本的に北から南への流向を示し、北の露頭では蛇行河川、南の露頭ではデルタの堆積物が卓越する。化石は数層準から産出している。産出した大型植物化石は、大量の *Pinus wallichiana* A. B. Jackson の球果 (写真1)、コナラ属コナラ亜属 *Quercus* subgen. *Lepidobalanus* (写真2-1, 2-2) およびアカガシ亜属 subgen. *Cyclobalanopsis* (写真2-3) の殻斗、ヒシ *Trapa* の果実 (写真2-4)、モクレン科 Magnoliaceae の果実 (写真2-5)、*Picea smithiana* (Wallich) Boiss の球果、モミ属 *Abies* の葉などである。同時に産出した木材は *Pinus wallichiana*、*Picea smithiana* が多く、モミ属 *Abies*、マテバシイ属 / コナラ属 *Lithocarpus* / *Quercus* などが伴う。大型植物化石、木材化石ともに磨耗しているものが多く、炭化しているものも多く見られた。これらの植物化石には、現在カトマンズ盆地周辺ではほとんど見られない *Picea smithiana* やコナラ属コナラ亜属が含まれており、カトマンズ盆地の最終氷期の植物相・植生を復原する貴重な資料である。

カトマンズ盆地の地質調査は平成11~13年度の国際学術研究「ヒマラヤの上昇テクトニクスと気候変動に関する総合的研究: カトマンズ・ナップの例」(研究代表者 在田一則) の一環として行われているものである。京都大学の酒井哲弥博士を中心に地質調査が続けられており、他の地点からもさまざまな植物化石が得られている。今後、カトマンズ盆地の植生史が明らかになり、ヒマラヤから日本列島につながる植物の分布変遷の議論に大きく貢献することが期待される。

(大井信夫 Nobuo Ooi)



写真1 *Pinus wallichiana* の球果。スケール = 5 cm。



写真2 産出した大型植物化石。スケール = 1 cm。